

不妊治療現場の 過去・現在・未来

～沈黙の時代～

荒木 晃子

不妊よもやま話

「不妊治療の原点は、ウシの繁殖の研究にある」 -
これは、本当のおはなし。
約 250 年前、イギリスでウシを繁殖するために研究
開発された生殖技術は、いまでは、その原点を知る
ひとよりも、不妊を治療するという「生殖医療の一
環」としての認識をもつひとの方が多いかもしれな
い。かくいう私も、人工授精という「ウシの生殖技
術」を「ヒトの生殖の問題解決に応用」とは、
なんて斬新で奇抜な発想をしたのか、と感心したう
ちの一人だ。同時に、人間も所詮動物なのだな、と
も思う。ヒトという動物が生き残るため、そして、
種の存続のために生殖医学ははじまったのだ - そう
考えると、時折メディアを通じて耳にする、「最先端
科学が人類の未来を切り開く！」というキャッチフ
レーズを、いぶかしくも、ちょっと誇らしげに感じ
るのはわたしだけではないだろう。しかし、これは
あくまでも、他人ごとに限定したおはなしの場合。
万が一、生殖の問題が自分自身に降りかかってきた
ら？なんて、想像したくもないほどやっかいな問題
だけれど、残念ながら、生殖年齢の世代は誰にでも
その可能性がある。

現在国内に、約 140 万人以上もの不妊に悩む当事
者がいるが、その大半はパートナーを持つ生殖年齢
にある男性と女性だ。さらに、生殖の問題が自分以
外の家族、たとえば、自分のパートナーに、また、
子どもたちや孫、兄弟姉妹に起きた場合も、当然他
人ごとではなくなる。ということは、約 140 万人以
上の不妊当事者×家族の数ほど、生殖の問題は“他
人ごとでは済まされない問題”として潜在している
ということになる。通常、ひとは、考えたくも想像
したくもないほどの重大な問題にかぎって、対応手
段を持たないことが多い。確かに、どうすることも、
どうしてあげることもできない問題には、“関わらな
い”という常とう手段も、あるにはある。しかし、
自分の大切な家族が悩んでいるとき、果たして、い
つまで見て見ぬふりをし続けられるだろうか。つい、
“何も策を持たない”けれど励ましたり、時には親
切心で、常識的なアドバイスをしたりする経験は、
誰にでも一度くらいはあるだろう。

一般に、孫の誕生を待ち望む親が、子どもができ
ない息子や娘夫婦に言葉の干渉を始めるとは、昔か
らよくある話だ。昔といっても、不妊の歴史は想像
以上に長く、江戸時代前期の医学書にはすでに、不
妊に関する記述があったという。時期は、1754 年国

内初の人体解剖が行われたその20年後、杉田玄白らによる翻訳書『解体新書』が出版される以前にまでさかのぼる。その出典は、西洋医学が支配的になる以前の、民間療法や中医学（いまでいう漢方医学）にあるとの説がある。不妊は、意外に奥が深い。歴史があるなら、伝統もあるのかもしれない。医学史にみる「不妊と医療」の密接な関係は、おそらく時代に生きる家族と共にその歴史を刻んできたのだろう。おそらく、不妊治療のない時代に生きる家族も、常に不妊問題と隣り合わせにあったにちがいない。それでは最初に、当事者援助の糸口となる“案外身近な不妊問題”を知るために、「生殖と医療」の知識を仕入れてみよう。

不妊治療ひとこと解説

現在国内では、全体の3分の一にあたる約50万人を超える当事者が、不妊治療を選択している。一般に、「ひとの生殖の問題を医学的に解決する手段」を不妊治療とよび、以前より、一般不妊治療として実施されていた人工授精は、『男性の精子を人為的に女性の体内に注入する医療行為』で、性交はしないが自然妊娠と原理は同じ、ともいえる。また、近年マスメディアや研究者が注目する、体外受精や顕微授精といった高度生殖補助医療が国内で普及し始めたのは、いまから約30年ほど前である。それらが人工授精と違う点は、妊娠成立までのプロセスが、女性の子宮内で自然に進行するのではなく、子宮の外で操作的に進行する点にあった。

ここで、体外受精と顕微授精に共通する『ジュセイ』という文字をみると、体外には『受精』、顕微には『授精』という表記が使用されている。この二つの違いは、体外受精は、子宮の外で卵子と精子が『自然に受精するため』の環境要因を人為的に整える医療行為をいい、受精そのものに人の介入はない。しかし、顕微授精は、卵子に精子を注入するという人為的行為によって授精成立を目指す医療行為であり、そこには『人の手が介入する』という特徴がある。なかでも、顕微授精は特に、「生命倫理に反する」、「神の領域を侵した」といった一部の世論を受け、生殖が医療の問題として脚光をあびる一因となっている。

歴史の幕開け

本稿では、「ひとの命を操作すること」への賛否を問うつもりは毛頭ない。不妊の問題を、他人ごとでは済まされない家族の問題として提起し、その援助を探りたいと考えている。そのためには、不妊問題を持つ家族に「何が起きたのか」を知らなければ、何も始まらない。当事者の経験から学び、そこから、援助の糸口を探そうとするものである。

サイレント・マイノリティといわれ、沈黙の歴史を持つ不妊と、その家族の過去をたどることは不可能に近い。しかし、いまを生きる当事者の肉声から、その時代に生きた「不妊と家族の物語」を知ることができる。本稿では、「不妊治療現場の過去・現在・未来」のそれぞれを生きる当事者の証言を、時系列に沿って紹介し、かれらに起きた「不妊と家族の問題」を検証することから、その問題解決手段を掘り下げていきたいと思う。

創刊号にあたる第1回目の社会背景は、不妊治療がまだ国内に普及していなかった時代の物語。第2次世界大戦終結後、戦後復興のなかで生きた不妊当事者と、その家族の「沈黙の物語」だ。語ることのできなかつた時代を生き、いま、沈黙を破り、「その生きざまを語る時が来た」女性の語りである。生殖医療の短い歴史以前、不妊を治療する術をもたなかつた当事者とその家族が、その時代をどう生き抜いたのだろうか。不妊と家族の歴史を、その時代を生きた当事者の証言でたどってみよう。

「沈黙の物語」

エピソード

“うまずめ”とよばれた女性の語り

「あの頃は、みんな、ああするしかなかったんだろうねえ。戦争(第二次世界大戦)でおとこの人がみんないなくなってしまって、結婚するにもまわりはおなご(女性)ばかり。相手を選ぶなんてできない時代だったからね。」

深いため息をつき、静かに微笑んでA子さんは語り始めた。彼女は昭和の時代に青年期を生きた女性の一人だった。第二次世界大戦中、疎開先で戦前の学校教育を

うけ、戦争が終結したころには、ちょうど結婚を意識する年齢だったという。

「あの時代、おなごはみな二十歳前には嫁にいったもんよ。いまみたいに、おともおんなも大学に行く時代じゃなかったからねえ。そもそも、おんなが大学に行けるようになったのは、確か戦争が終わってからでしょう？それまでは、おなごの分際で学校にいったらどうするのか、って親にも叱られていたくらいだから。おんなは、いいところへ嫁に行って、子どもをたくさん産んで、亭主にかわいがってもらう、これが幸せって思っていたんだから。え？わたし？もちろんわたしもそう思っていましたよ。結婚して、たくさん子どもを産んで、それがおなごの幸せなんだから。あなたもそう思うでしょ？」

確かに、そうかもしれない。そういう生き方も、幸せになるためのひとつの選択肢なのだと思う。しかし、時代はかわり、女性が自身の生き方を選べる時代になった今、彼女の意見に賛同する女性たちは、以前ほど多くはないはずだ。

その後、A子さんは女学校を卒業し、終戦後、親のすすめるままB氏と婚姻関係を結んだそう。B氏は出征免除を受けた、温厚なお人柄の男性で、当時数名の職人を雇い自営業を営んでいたという。ふたりの結婚生活は、経済的には比較的豊かで夫婦仲はよかつたらしい。その結婚は、A子さんのいう「おんなの幸せな生きかた」への順調なすべり出しだったのかもしれない。人生のパートナーを得て家族をつくる、という家族の形成過程は、きっと、昔も今も何も変わってはいないんだ、そう思った。

多くの青年男性を戦場に駆り立てた戦争は、国内に残されたたくさんの女性たちが子どもを産み、家族をつくる可能性をも奪っていた、という事実を知った。その中で、A子さんは、相手を選べないまでも、人生の伴侶を得たのだった。戦争が残した爪痕は、戦後日本の復興の陰に隠れて見えなかった「戦争を生き抜いた若い女性たちのはかない夢」を打ち砕き、あたらしい家族の未来をも奪ってしまったのだ。改めて、戦争が残した罪を実感した。敗戦後の荒廃した社会の中で、夫婦で苦労を共にした生活の様子や、共に戦争を生きぬいた足跡を語るなか、A子さんは再び大きく息をつき、同時に、それまで浮かべていた笑顔がくもった。

「まあ、人生、そう、うまくいくとは限らないもんよね。わた

しには、子ができなくてね…うん。亭主には申し訳ないし、親も『このままじゃ面目が立たない』ってね。結局、家に帰って来い、ということになって…。いまは、どうか知らないけれど、むかしは、決して珍しいことではなかったんよ。うまずめは、家に戻るのが当たり前だった。『嫁して三年子無きは去れ』ってことわざがあるでしょう？子を産めない娘を嫁がせた親も、嫁ぎ先に謝りに行ったもんよ。そんな時代だったんだね。(しばらく沈黙)当時、わたしには年頃の妹が二人いてね、そのうち上の妹が、しばらく一緒に暮らすことになったの。その子はちょっと体が弱い子でね。まあ、いまから思えば、親も色々考えた末のことだったんだろうねえ。当時は、親のいうことは絶対だったし、ましてや親に背くなんて、だれも考えなかった。わたしも妹もそれでいいと思った。そうね…少なくとも、わたしは、そう思っていたと思う。」

初対面のあいさつで、「不妊の研究、特に、不妊に悩む当事者の援助体系をつくり、子どもができない夫婦の家族支援を研究している当事者です」と自己紹介したわたしを、「そう！？そんな時代になったのね～」と満面の笑みで迎えてくれた理由が、初めて理解できた気がした。同時に、話を聞いている自分自身の笑顔が消えたことにも気が付いた。

「どれくらいたった頃か…妹に子どもができてね。そう、もちろん、亭主の子どもですよ」

おもわず、「え？そんな！」と絶句するわたしの言葉を遮るように、A子さんは続けた。

「ほかでもない、実の妹に亭主の子どもが生まれるんだから、そりゃ、うれしかったわよ。親も亭主も、みんな喜んでくれたしね。わたしも、これでいいんだ、っておもったね」

子どもが誕生する前に、A子さんは妹と3人で暮らす家を出た。当時、離婚した女性を「出戻り」とよぶ慣習があり、一度嫁ぐと、実家へは簡単に戻れない時代だったらしい。その中で、“うまずめの女性”は実家へ帰るケースが多く、離婚の正当な理由として周知されていた、とA子さんは説明した。また、子どもができず離婚した女性は、妻を亡くした子持ちの男性の再婚相手として歓迎され、A子さんもその例外ではなかった。実母を失った子どもたちの母親として、再婚相手の男性とその後の人生を送り、晩年は、その男性の最期を看取ったという。最後に、**「いまは、時折帰郷する子どもたちが連れてくる、元気な孫たちの成長が何よりの楽しみです」**と満面

の笑みで語ってくれた。

彼女に思いを馳せてみた。選択肢のない時代に生まれ、女性が人生を選べない社会を生きたA子さん - 彼女をそう表現するには違和感がある。過去に経験した不妊ゆえの人生を、当時の社会背景や人々の慣習の中で生き延びた小柄な老女の語りには、悲しくもたくましく、複雑かつ明快に「生きるための選択肢」を選びぬいた、強靱な生命力を感じざるを得なかった。「あれは、不妊を生きた力だったのかも知れない」、ふと、そうおもった。

「沈黙の物語」

エピソード

“もう一つの家族”の語り

「成人し、戸籍謄本で自分の出生を初めて知った時は、正直おどろきました。父の最初の結婚相手が叔母だと知って…小さいころから、特に可愛がってもらっていて、親せきの中でも、一番好きな人だったのです。母とも仲が良く、うちにもよく遊びに来ていました。なのに、わたしが生まれるまで、父は叔母と結婚していたなんて！わたしが生まれてから、母と入籍したそうです。そのことを知った時は、何が何だか分からなくて、母に問い詰めたんです…でも、母は何も言ってくれませんでした。ただ、『仕方なかった。その時は』とだけ答えました。それ以降、そのことについては、誰も話そうとしません。もう、昔の話ですから…え？知りたいかって？そうですね…複雑です…でも、父のことは、男性として許せない気がします。娘としてではなく、同じ女性として。」

短いエピソードではあるが、うえは、Aさんの姪、つまり、“あの時誕生した” Aさんの妹の長女の語りである。彼女は現在結婚し、夫婦共働きで、ふたりの息子と親子4人で暮らしているという。現在、彼女の人生に不妊問題はない。しかし、彼女の出生は、「不妊と家族の問題」と背中合わせだったのだ。前述の、Aさんが語った内容を伝えることなしに、「不妊というテーマ」で彼女が語ってくれたのは、決して、他人ごとの話ではなかった。

おわりに

今回紹介した二つのエピソードは、不妊をキーワ

ードにその形態をかえた、実在の家族のケースである。まず、すべての語りを通して、未だに払しょくできない憤りが2点ある。Aさんをはじめとするこの家族の、「不妊と家族の問題」に対して、援助的立場の人間が誰も関与していない、という事実がそのひとつだ。次に、不妊をAさん個人の問題として、「Aさんを排除する」という手段で家族の問題を解決しようとした点、の2点である。不妊当事者は果たしてAさんひとりだったのか、不妊は家族に何をもたらしたのか、など、疑問は尽きない。確かに、「不妊と家族の問題」は、Aさんの人生に一瞬大きな影をおとしたのかもしれない。しかし、不妊を誰の問題として、家族がどう対処するかによって、その結果は大きく違っていた可能性がある。「過去に起きた家族の問題」であるこのケースの場合、「結果が変わる」とは、家族の未来が変わる可能性につながるはずだ。つまり、家族の「現在が変わる」ことを意味することにはならないだろうか。家族の選択肢は他になかったのだろうか。過去にたくさんの課題を残したまま、次号では、過去からつながっている「家族の今」を検証したい。過去から我々は何を学び、現在、家族はどのようにして「不妊と家族の問題」に対処しているのだろうか。不妊治療のなかった時代に生きた当事者たちには、その時代を生きるための知恵と選択肢が確かにあった。ならば、不妊を治療する選択肢を持つ現在の不妊当事者たちの、「不妊と家族の問題」はすべて解決されているのだろうか。不妊治療する当事者の語りから、「現在」を検証したいと思う。みなさんは、うえの「沈黙の物語」から、何を受け取っていただいたでしょうか。

謝辞：不妊を語る事を、「いまなら（話せる）」といっただころよく引き受けてくださり、そして、それを、本稿で提供することを「もう、（夫も亡くなり）時効だからいいでしょう？」と笑ってくださったAさんと、エピソード に登場した女性に、心から感謝申し上げます。おふたりは「時代の証言者」であり、その語りからたくさんの学びを探らせていただくことを、ここにお約束いたします。